

尊貴にして生命を施す十字架の

全地の擧榮祭聖体礼儀



司祭祈禱 単音聖歌譜

注意 譜面中、五線譜上に ||○|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

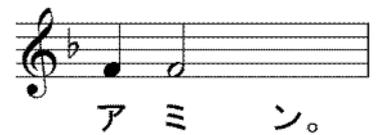
2018年9月27日 作成

2024年9月27日 一部改訂

釧路ハリストス正教会 管轄司祭ステファン内田圭一

司祭) (黙誦：天の王、慰むる者よ、眞實の神、在らざる所なき者、満たざる所なき者
 よ、萬善の寶藏なる者、生命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を
 もろもろ けがれ いさぎよ しぜんしゃ われら たましい すく たま い たか
 諸の穢より潔くせよ、至善者よ、我等の靈を救い給え。至と高き
 こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ い たか こうえいかみ
 は光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、至と高きには光榮神に
 き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ しゅ わ くちびる ひら しか わ
 歸し、地には平安降り、人に恵は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我
 くち なんぢ さんび あ
 が口は爾の讚美を揚げんとす、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、

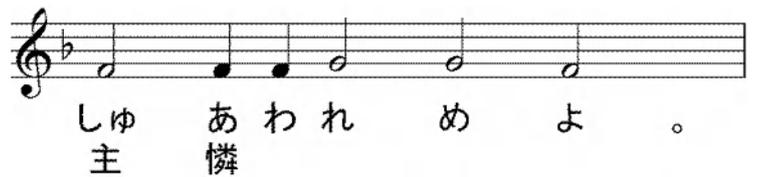


【 大聯禱 】

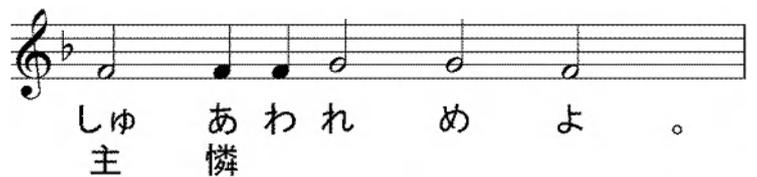
司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、

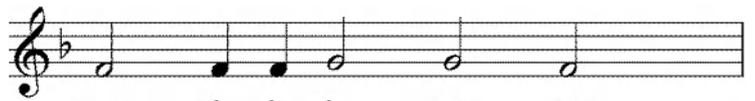


司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



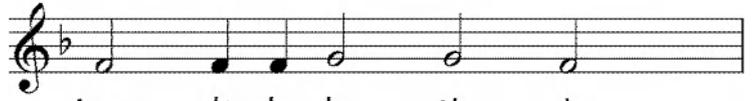
司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



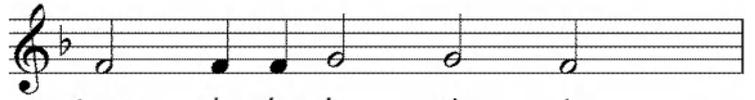
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) わがくに てんのう およ くに つかさど もの たため しゅ いの
我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



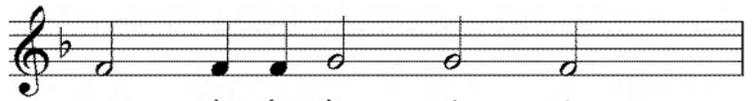
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こ まち およそ まち ちほう たため およ しん もつ こ うち お もの たため しゅ いの
此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



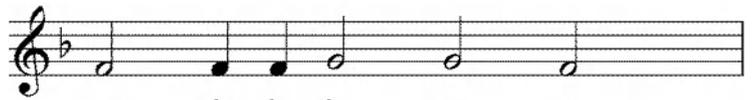
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい たため しゅ いの
氣候 順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



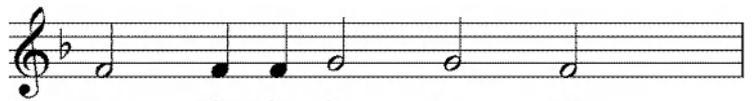
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び
かれら すくい たため しゅ いの
彼等の救の爲に主に禱らん、



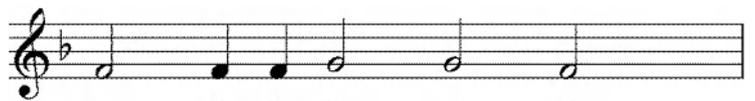
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが たため しゅ いの
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

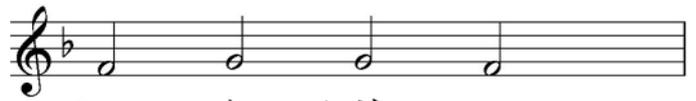


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。
主 爾

司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の愛憐とを施し給え、)

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

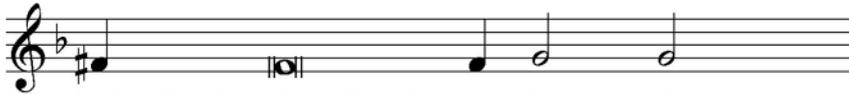


ア ミ ン。

【 第一アンティフォン 】



わ が か み よ 、 わ が か み よ 、 わ れ に き き た ま え 、
我 神 我 神 我 聽 給



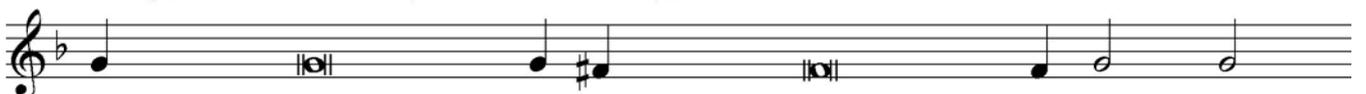
なんぞ わ れ を す て た る 。
何 我 遺



きゅうせ いしゅよ 、 しょうしんぢよの きとうにより
救 世 主 生 神女 祈 禱 因



て わ れ ら を す く い た ま あ え 。
我 等 救 給



わ が よ ぶ こ と ば は わ が す く い よ り と お し 。
我 呼 言 我 救 遠



きゅうせ いしゅよ 、 しょうしんぢよの きとうにより
救 世 主 生 神女 祈 禱 因



て わ れ ら を す く い た ま あ え 。
我 等 救 給

わが かみよ、われ ひるによ べども、なんぢ みみ
我 神 我 晝 呼 爾 耳

をか たぶ けず、よるによ べども、われ やすき
傾 夜 呼 我 安

を え ず。
得

きゅう せ いしゅよ、しょうしんぢよの きとうにより
救 世 主 生 神女 祈 禱 因

て われら を すく いたま あ え。
我 等 救 給

しかれどもなんぢ せいしゃは イズライリのさんしょうの う
然 爾 聖 者 讃 頌 中

ちにおる なり。
居

きゅう せ いしゅよ、しょうしんぢよの きとうにより
救 世 主 生 神女 祈 禱 因

て われら を すく いたま あ え。
我 等 救 給

こう えい はちちとこ せいしんに きす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

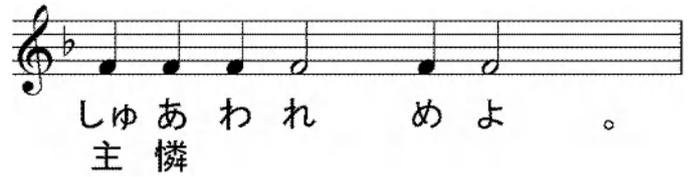
いつも よよに、アミン。
何時 世 世

きゅう せ いしゅよ、しょうしんぢよの きとうにより
救 世 主 生 神女 祈 禱 因

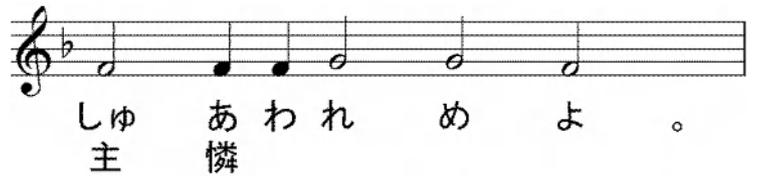


【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ} 我等復又 ^{しゅ いの} 安和にして主に禱らん、



司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんちよ えいていどうちよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

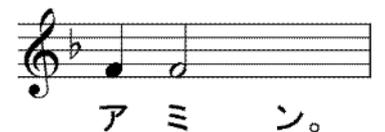


司祭) (黙誦: ^{しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい} 主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

^{じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから} の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

^{もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか} を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) ^{けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、



【 第二アンティフォン 】



よ、われらなんぢにアリルイヤをうたうもの
我 等 爾 歌 者

をすくいたまあえ。
救 給

かみわがこせいよりのおうはすくいをちのな
神 我 古 世 王 救 地 中

かになせり。
作

かみのこ、みにてていせられしししゅ
神 子 身 釘 主

よ、われらなんぢにアリルイヤをうたうもの
我 等 爾 歌 者

をすくいたまあえ。
救 給

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

かみのどくせいのこならびにことばよ、
神 獨 生 子 並 言

しせざるものにしてわれらをすくわんがため
死 者 我 等 救 爲

あまんじて せいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ
 甘 聖 生 神女 永 貞 童 女

マリヤよりみをと かり、かみのせいをかえ
 身 取 神 性 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、
 死 以 死 踏 破 神 み よ、

せいさんしゃのい つとして ちちとせいしんとと
 聖 三者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 よ、我 等 救

く いたま あ え。
 給

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの
 我等復又安和にして主に禱らん、

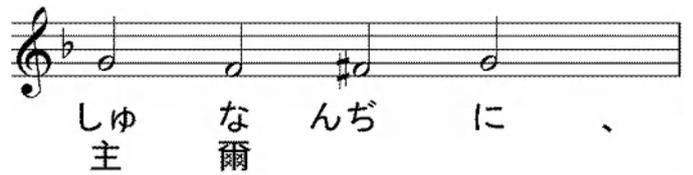
しゅあわれ めよ、しゅあわれ めよ。
 主 憐 主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しせいしけつ いたさんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 、
主 爾

司祭) (黙誦: われら こ ころ とうわごう きとう たま かつ にさんになんぢ な よ あつ もの
我等に此の公 同和合の祈禱を賜い、曾て二三人 爾 の名に依りて集まる者に
そのもと ところ たま やく しゅ なんぢみづか いま なんぢ しょぼく ねがい その
も其 求むる 所 を賜うを約せし主よ、 爾 親ら今も 爾 が諸 僕の 願 を其
りえき ため かな われら こんせ なんぢ しんり し らいせ えいえん
利益の爲に應わしめて、我等に今世には 爾 の眞理を識り、來世には永遠の
いのち え たま
生命を得るを 給え、)

司祭) けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま
蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に献ず、今も
いつ よよ
何時も世に、



ア ミ ン、ア ミ ン。

【 第三アンティフォン 】

しゅ は お う た り 、 しゅみんお の の く べ し 。
主 王 諸 民 戦

しゅ よ 、 な ん ぢ の た み を す く い 、 なんぢ
主 爾 民 救 爾

のぎょう に ふ く を く だ せ 、 わ が く に の
業 福 降 吾 國

てん の お う お よ び く に を つ か さ ど る も の に て
天 及 國 司 者 敵

き に か た し め 、 なんぢ の じゅ う じ か に て
勝 爾 十 字 架

なんぢ の す ま い を ま も り た ま え 。
爾 住 處 守 給

しゅはおうたり、しよみんおののくべし、
主 王 諸 民 戦

かれはヘルヴィムにざす、ちはふるうべ
彼 坐 地 震

し

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにの
業 福 降 吾 國

てんのおうおよびくにをつかさどるものにて敵
天 及 國 司 者 敵

きにかたしめ、なんぢのじゅうじかにて
勝 爾 十 字 架

なんぢのすまいをまもりたまえ。
爾 住 處 守 給

しゅはシオンにありておおいなり、かれ
主 在 大 彼

はばんみのうえにたかし
萬 民 上 高

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにの
業 福 降 吾 國

てんの お うお よび くに を つ か さ ど る も の に て 敵
 天 及 國 司 者 敵

きにかたし め、なんぢのじゅうじか にて
 勝 爾 十 字 架

なんぢのすまいをまもりたまえ。
 爾 住 處 守 給

しゅにそのうるわしきせいしょにふくは
 主 其 美 聖 所 伏 拜

いせよ。

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主 爾 民 救 爾

のぎょうにふくをくだせ、わがくにの
 業 福 降 吾 國

てんの お うお よび くに を つ か さ ど る も の に て 敵
 天 及 國 司 者 敵

きにかたし め、なんぢのじゅうじか にて
 勝 爾 十 字 架

なんぢのすまいをまもりたまえ。
 爾 住 處 守 給

司祭) (黙誦: ^{しゅさい}主宰・^{しゅ}主・^{われら}我等の^{かみ}神、^{しよてん}諸^{てんしおよ}天に^{てんししゅ}天使^{ひんきゅう}及び、^{ぐんたい}天使^た首の^た品^{ぐんたい}級と^た軍隊とを立て

て^{なんぢ}爾が^{こうえい}光^{ほうじしゃ}榮の^{もの}奉事者となしし者よ、^{もと}求む^{われら}我等の^い入るに^{ともな}伴いて、^か彼の^{われら}我等と

とも^{つと}偕に^{とも}務め、^{なんぢ}共に^{しぜん}爾の^{さんえい}至善を^{せいてんしらい}讚^{いた}榮する^{たま}聖^{けだし}天使等の^{およ}入るを^{およ}致させ給え、^{およ}蓋、凡

そ^{こうえい}光^{そんきふくはい}榮尊^{なんぢちち}貴^こ伏^{せいしん}拜^きは^{いま}爾^{いつ}父と^{よよ}子と^{よよ}聖^{よよ}神に^{よよ}歸す、^{よよ}今も^{よよ}何時も^{よよ}世^{よよ}世に、)

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖入の句 】



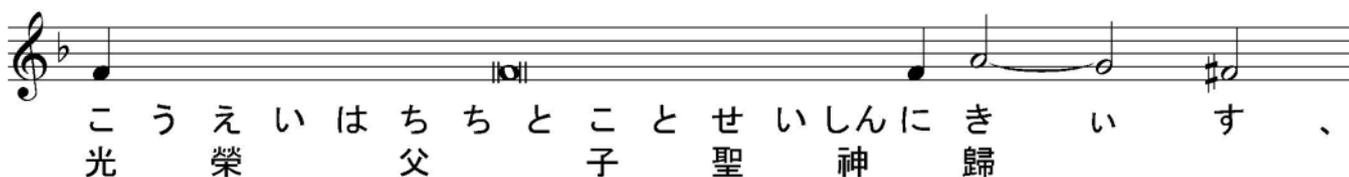
しゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ
主 我 神 崇 讃 め 、 其 足
し だ い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な
台 伏 拜 是 聖
り 。

【 十字架擧祭のトロパリ 第1調 】



しゅ よ 、 な ん ぢ の た み を す く い 、 な ん ぢ
主 爾 民 救 爾
の ぎ ょ う に ふ く を く だ せ 、 わ が く に の
業 福 降 吾 國
て ん の お う お よ び く に を つ か さ ど る も の に て
天 及 國 司 者 敵
き に か た し め 、 な ん ぢ の じ ゅ う じ か に て
勝 爾 十 字 架
な ん ぢ の す ま い を ま も り た ま え 。
爾 住 處 守 給

【 十字架擧祭のコンダク 第4調 】



こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き い す 、
光 榮 父 子 聖 神 歸 い す 、

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何時 世世

あまんじてじゅうじかにあげられしハリストスかみ
 甘 十 字 架 擧 神

よ、なんぢがどうめいのあらたなるすまいに
 爾 同 名 新 住 處

なんぢのじれんをたまえ、なんぢのちからを
 爾 慈 憐 賜 爾 力

も お っ て わ が く に の て ん の う お よ び く に を
 以 我 國 天 皇 及 國

つかさどるものをたのしましめて、かれ
 司 者 樂 彼

らにてきにかたしめたまあえ、かれら
 等 敵 勝 給 彼 等

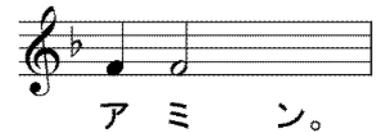
はなんぢのたすけとしてへいあん**のぶ**う
 爾 援 助 平 安 武 武

き、かたれぬはたをたもてばなり。
 器 勝 旗 有

司祭) (黙誦： ^{せい}聖なる神、^{かみ}聖者の中に^{せいじゃ}息い、^{うち}セラフィムより^{いこ}聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより^{さんえい}讚榮せられ、^{ことごと}悉くの^{てんぐん}天軍より^{ふくはい}伏拜せられ、^{ばんぶつ}萬物を^む無より^{ゆう}有と
 なし、^{ひと}人を^{なんぢ}爾の^{ぞう}像と^{しょう}肖とに依りて造り、^よ爾が^{つく}諸の^{なんぢ}賜を^{もろもろ}以て之を^{たまもの}飾り、^{もつ}これ^{かざ}を飾り、
^{ねが}願う者に^{もの}智慧と^{ちえ}明悟とを^{めいご}與え、^{あた}罪を^{つみ}行^{おこな}う者を^{もの}棄てずして、^す其^{その}救の^{すくい}爲に^{ため}痛悔
 を立て、^た我等^{われらいや}卑しくして^{ふとう}不當なる^{なんぢ}爾の^{しょぼく}諸僕を、^こ此の^{とき}時に於ても、^{おい}爾が^{なんぢ}聖な
 る^{さいだん}祭壇の^{こうえい}光榮の^{まえ}前に立ちて、^た爾に^{なんぢ}當然の^{とうぜん}伏拜^{ふくはい}讚榮を^{さんえい}奉^{たてまつ}るに^た堪うる^{もの}者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
 なしし主宰よ、爾 親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が 靈と體と
 せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい しょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢょ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文に代えて 】

しゅさい い よ 、 われらあ なんぢのじゅ うじか
 主宰 我等 爾 十字架
 にふくは い し 、 なんぢのせいなる
 伏 拜 爾 聖
 ふくかつをさんえ い せん。しゅさい い よ 、
 復活 讚 榮 主宰
 われらあ なんぢのじゅ うじかにふくは い
 我等 爾 十字架 伏 拜
 し 、 なんぢのせいなる ふくかつをさん
 爾 聖 復活 讚
 え い せん。しゅさい い よ 、 われらあ
 榮 主宰 我等
 なんぢのじゅ うじかにふくは い し 、 なん
 爾 十字架 伏 拜 爾



司祭) (黙誦: 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主、我が神を崇め讃め、其足凳に伏し拜めよ、是れ聖なり、

しゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ し だ
 主 我 神 崇 讃 其 足 台
 い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な り 。
 伏 拜 是 聖

誦經) ^{しゅ おう} 主は王たり、^{しよみんおのの} 諸民戦くべし、

しゅ わ が か み を あ が め ほ め 、 そ の あ し だ
 主 我 神 崇 讃 其 足 台
 い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い な り 。
 伏 拜 是 聖

誦經) ^{しゅ わ かみ あが ほ} 主、我が神を崇め讃め、

そ の あ し だ い に ふ し お が め よ 、 こ れ せ い
 其 足 台 伏 拜 是 聖
 な り 。

【 ^{アポストロス} 使徒經 125 端 コリント前書 1 章 18~24 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ} コリント人に^{ぜんしょ よみ} 達する前書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{けだしじゅうじか} 蓋十字架の^{ことば} 言は、^{ほろ} 滅ぶる者の^{もの} 爲には^{ため} 愚なり、^ぐ 我等救わるる者の^{われらすく} 爲には^{もの} 神

^{ちから} の能なり。^{けだししる} 蓋録して云えるあり、^い 我智者の^{われちしゃ} 智を^ち 滅し、^{ほろぼ} 識者の^{しきしゃ} 識を^{しき} 廢せん。^{はい} 智者^{ちしゃいづく} 安

^あ にか在る、^あ 學士は^{がくし} 安^{いづく} にか在る、^あ 此の世の^{こよ} 辯論者は^{べんろんしゃ} 安^{いづく} にか在る、^あ 神は^あ 此の世の^{こよ} 智慧を^{ちえ} 愚と爲

^{あら} らしめしに^{けだしよ} 非ずやと。^{そのちえ} 蓋世は^{もつ} 其智慧を^{かみ} 以て、^{かみ} 神を^{ちえ} 神の^{おい} 智慧に^し 於て^よ 識らざりしに^{かみ} 由りて、^{かみ} 神

^{でんどう} は^ぐ 傳道の^{もつ} 愚を^{しん} 以て、^{もの} 信ずる者を^{すく} 救わんことを^{よろこ} 喜べり。^{けだし} 蓋^{じん} イウデヤ人は^{きゅうちょう} 休徴を^こ 乞い、

^{ちえ} エルリン人は^{もと} 智慧を^{しか} 覓む、^{われら} 然れども^{じゅうじか} 我等は^{てい} 十字架に^{つた} 釘せられし^こ ハリストスを^こ 傳う、^こ 此れイ

ウダヤ人の爲には 礙、エルリン人の爲には愚、惟召されたる者の爲には、イウダヤ人 及

びエルリン人を論ぜず、ハリストスは神の能 及び神の智慧なり。

(比較用 口語訳) 十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である。すなわち、聖書に、「わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしいものにする」と書いてある。知者はどこにいるか。学者はどこにいるか。この世の論者はどこにいるか。神はこの世の知恵を、愚かにされたではないか。この世は、自分の知恵によって神を認めるに至らなかった。それは、神の知恵にかなっている。そこで神は、宣教の愚かさによって、信じる者を救うこととされたのである。ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。しかしわたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである。

【 アリルイヤ 第1調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

Musical notation for the first part of the hymn. It consists of two staves of music in G major (one sharp). The first staff contains the lyrics 'アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、' and the second staff contains 'ア リル イ ヤ。'.

誦經) 爾が古より獲たる會を記憶せよ、

Musical notation for the second part of the hymn. It consists of two staves of music in G major. The first staff contains the lyrics 'アリル イ ヤ、アリル イ ヤ、' and the second staff contains 'ア リル イ ヤ。'.

誦經) 神、我が古世よりの王は 救を地の中に作せり、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書60端 19章6~11、13~20、25~28、30~35節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) ^{つつし き か とくしさいしよちょう ちょうろうら あいかい ころ さだ} 謹みて聴くべし、彼の時司祭諸長と長老等と相會して、イイススを殺さんことを定
^{かれ ひ いた い これ さ これ さ じゅうじか てい じゅうじか} め、彼を曳きてピラトに至りて曰えり、之を去れ、之を去れ、十字架に釘せよ、十字架に
^{てい かねら い なんぢらかれ と じゅうじか てい けだしわれかれ つみ み} 釘せよ。ピラト彼等に謂う、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ、蓋我彼に罪あるを見
^{じんこた い われら りつぼう わ りつぼう よ かれ し} ず。イウデヤ人答えて曰えり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし、
^{けだしおのれ かみ こ な こ ことば き ますますおそ またこうかい い} 蓋己を神の子と爲せり。ピラト此の言を聴きて、益懼れたり。復公廨に入りて、

イイスにい謂なんぢう、爾いづは奚しかれよりする。然しかれどもイイスかれ彼こたえに答なを爲かれさざりき。ピラトかれ彼かれに
 謂いう、我われに言いわざるか、爾なんぢ豈なんぢ我なんぢに爾じゅうじかを十てい字けん架またなんぢに釘ゆるする權けんあり、亦けん爾けんを釋ゆるす權けんあ
 るを知らざるか。イイスこた答いえて曰うえり、上うえより爾なんぢに與あたえられしに非あらざれば、爾なんぢ我われに對たい
 して一いつも權けんあるなし、ピラトこ此ことの言ばを聞ききて、イイスそとを外ひに曳いき出しんだし、審ばん判ぎ座ざに、リ
 ヴオストラトン、エウレイことばの言なにガヴァタと名ところづくる所ざに坐そのひせり。其そのひ日はパスハ逾越そなえび節なの備な日なに
 して、時ときは約およ六そ時ろくじなり。ピラトじんイウデヤ人いに謂みう、視なんぢよ、爾ら等おうの王しかなり。然しかれども彼かれ等ら
 號さけびて曰いえり、之これを去され、之これを去され、十じゅうじか字てい架ていに釘かれせよ。ピラトい彼なんぢ等らに謂おうう、爾ら等らの王おうを
 釘ていせんか。司し祭さい諸しよ長ちやう對こたへて曰いえり、我われ等らにはケサリほかの外おうに王そのときなし。其そのとき時ときピラトかれ彼じゅうを十
 字じか架ていに釘ためせん爲わたに付かれせり。彼かれ等らイイスとを取ひりて、曳ゆき行かれけり。彼かれ己おのれの十じゅうじか字お架いを負いひ、出
 でて、髑され髑こうの處べ、エウレイところの言ことばにゴルゴタと名なづくる所ところに至いたれり。彼かしこ處あに在かれりて彼かれを
 十じゅうじか字てい架ていに釘またにせり、又にん二人かれを彼ともと偕ていに釘ひとりせり、一みぎは右ひとり、一ひだりは左なか、イイス中あに在あり。
 ピラトふだ標しよを書じゅうじかして、十う字お架しよの上いわに置いけり、書いして云わく、イイスじんナゾレイ、イウデヤ人じんの
 王おうと。イウデヤ人じんの多おおくの者もの此この標ふだを讀よめり、蓋けだしイイスていの釘ところせられし處まちは城ちかに近ちか
 りき、其そのふだ標ふだエウレイ、グレチャ、ロマぶんの文もつを以しるて書はされたり。イイスはの母はと、母はの姉しまい妹まいク
 レオパつまの妻つまマリヤと、マリヤそのじゅうじかマグダリナと、其かた十た字た架たの旁そのはに立およてり。イイスそのはは其およ母およ及
 び愛あいする所ところの門もん徒との此こに立こてるを見みて、母はに謂いう、婦おんなよ、視みよ、爾なんぢの子こなり。次つぎて門
 徒もんに謂いう、視みよ、爾なんぢの母はなり。其そのとき時ときより此このの門もん徒と彼かれを己おのれの家いえに取とれり。厥そののち後ちイイス
 ス一切いつさいの事こと已すに成なりたるを知しりて、乃すな首わちを俯こうして神ふを付しんせり。其わた日はそのひ備そな節えび日なにして、
 彼かの安スポ息タ日は大おなる日ひなるに因よりて、イウデヤ人じんは安スポ息タ日に屍しかを十じゅうじか字とど架とどに留とどめざらん
 ため、ピラトかれに、彼かれ等らの脛はぎを折おりて、屍しかを取り下とろさんこことを請ゆえり。故こに兵ゆ卒へい來そつりて彼
 と偕ともに十じゅうじか字てい架ていに釘だいせられし第だ一いちの者ものの脛はぎを折おり、第だ二にの者ものにも亦また然しかせり。イイスに
 來きたりて、其そのす已すに死ししたるを見みたれば、彼かれの脛はぎを折おらざりき、然しかれども一ひとり人の兵へい卒そつ、戈ほこを以
 て、其そのわ脅きを刺させり、忽たち血まと水ちと出みづでたり。見いし者みは證ものを作しょうせり、其そのしょう證まは眞ことなり。

(比較用 口語訳) 祭司長たちや下役どもはイエスを見ると、叫んで「十字架につけよ、十字架につけよ」と言った。ピラトは彼らに言った、「あなたがたが、この人を引き取って十字架につけるがよい。わたしは、彼にはなんの罪も見いだせない」。ユダヤ人たちは彼に答えた、「わたしたちには律法があります。その律法によれば、彼は自分を神の子としたのだから、死罪に当る者です」。ピラトがこの言葉を聞いたとき、ますますおそれ、もう一度官邸にはいってイエスに言った、「あなたは、もともと、どこからきたのか」。しかし、イエスはなんの答もなさらなかった。そこでピラトは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。イエスは答えられた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない」。ピラトはこれらの言葉を聞いて、イエスを外へ引き出して行き、敷石(ヘブル語ではガバタ)という場所で裁判の席についた。その日は過越の準備の日であって、時は昼の十二時ころであった。ピラトはユダヤ人らに言った、「見よ、これがあなたがたの王だ」。すると彼らは叫んだ、「殺せ、殺せ、彼を十字架につけよ」。ピラトは彼らに言った、「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」。祭司長たちは答えた、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」。そこでピラトは、十字架につけさせるために、イエスを彼らに引き渡した。彼らはイエスを引き取った。イエスはみずから十字架を背負って、されこうべ(ヘブル語ではゴルゴダ)という場所に出て行かれた。彼らはそこで、イエスを十字架につけた。イエスをまん中にして、ほかのふたりの者を両側に、イエスと一緒に十字架につけた。ピラトは罪状書きを書いて、十字架の上にかげさせた。それには「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」と書いてあった。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったので、多くのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。それはヘブル、ローマ、ギリシヤの国語で書いてあった。さて、イエスの十字架のそばには、イエスの母と、母の姉妹と、クロパの妻マリヤと、マグダラのマリヤとが、たたずんでいた。イエスは、その母と愛弟子とがそばに立っているのをごらんになって、母にいわれた、「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です」。それからこの弟子にいわれた、「ごらんなさい。これはあなたの母です」。そのとき以来、この弟子はイエスの母を自分の家に引きとった。そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、首をたれて息をひきとられた。さてユダヤ人たちは、その日が準備の日であったので、安息日に死体を十字架の上に残しておくまいと、(特にその安息日は大事な日であったから)、ピラトに願って、足を折った上で、死体を取りおろすことにした。そこで兵卒らがきて、イエスと一緒に十字架につけられた初めの者と、もうひとりの者との足を折った。しかし、彼らがイエスのところにきた時、イエスはもう死んでおられたのを見て、その足を折ることはしなかった。しかし、ひとりの兵卒がやりでそのわきを突きさすと、すぐ血と水とが流れ出た。それを見た者があかしをした。そして、そのあかしは真実である。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※ 聖体礼儀③(金ロイオン)へ